

社会学部研究会特別例会(1995年10月9日開催)

## フランスにおける高齢者の生活の変化 (1965~1995年)

パリ第七大学名誉教授 ピエール・アンサール

鹿児島県立短期大学教授 齊藤悦則(訳)

これからわたしは、今日のフランスの高齢者の生活の質、その暮らしのありようを全体的に眺めてのお話をしたいと思います。ですから、いきおいせっかちで大まかなお話になるかもしれません。理論や方法論上の問題は棚上げにして、いろいろなアンケートや統計の数字も便利に使わせていただきます。また、暮らしぶりの変化にかんしてはここ30年、すなわち1965年あたりから現在までのものにあえて注目したい。といいますのも、60才以上の高齢者の生活はこの30年の間にとりわけ大きく変化しているからです。わたしたちが今後の動向を展望したいと思うのであれば、ここにいたるまでの流れを注意深く考察しなければなりません。

わたしはテーマを七つにわけて話をさせていただきます。高齢者の経済生活から道徳的規範にいたる七つのテーマによって、「人生の第3期」(第4期との区別については後述しますが)の今日的な特徴を浮かび上がらせてみたいと思うのです。

### 1

まず、1960年代を境に大きな変化が生じたことを見ておきましょう。すなわち、退職の年齢、退職者の数、退職以後の生活期間、所得のいずれもがこのときから大きく変化しました。

——統計によりますと、今日、退職者の年齢は60年代よりも若くなっています。フランス人はますます若いうちから引退生活に入るようになっているのです。ここで考察しようとしている30年の初めの時期、1960年代から70年代においては、民間サラリーマンの退職年齢はふつう65才でした。現在では、民間の法定退職年齢は60才です。しかし、多くの労働者はそれよりもっと早く退職して

しまいます。職種柄、早めに退職するケース(警察や交通にかかわる職種の一部は50才が定年)もあるのですが、産業の再編によって「早期退職」を余儀なくされたケースの方が多い。

ひとがじっさいに何才から人生の第3期に入るかは、産業分野、業種、職種ごとにまちまちです。「働いて生きる時期」と「働かないで生きる時期」との区切り目は一様ではありません。しかし、全体としての傾向ははっきりしています。しかも、その流れは80年代に入りますますます加速しているようです。すなわち、かなりの数の賃金労働者が60才よりも前に退職するようになっています。

——退職生活者の数も増えました。これは退職の年齢が早まっていることと、そして周知のとおり、ひとびとの寿命が伸びていることによるものです。フランス人の平均寿命も日本人の平均寿命とそう変わりがありません(日本人男性は76才、女性は83才ですが、フランス人も男性は74才、女性は82才です)。フランスではほぼ5人に1人が60才以上の高齢者で、1982年にはその総数1130万人となりました。

——したがって、退職者はかつてよりも年齢が若く、その数も増えております。しかも、退職後の生活期間はおしなべて昔よりもずっと長くなりました。60才前に退職すれば、15年以上の退職生活をすごすことになるわけです。今日では、それが25年、30年あるいはそれ以上になっているひともし珍しくありません(最近出た本のタイトルから老後の「開脚」と呼ばれたりします)。

——そして、とりわけ今日的な現象として指摘しなければならないのは、高齢者の富裕化です。この30年間に高齢者の所得は大きい伸びを示しました。ここでは数字をふたつだけ挙げることにしましょう。

ひとつは、1965年から90年にかけて、60才の時点での退職年金が3倍化したことです。現役労働者のサラリーとの差も急速に縮まっております。

ふたつめに、今日では60才以上の高齢者の一家あたりの可処分所得が、年10万フランを上回るようになったことです。年齢層ごとの可処分所得を見比べてみますと、今日もっとも豊かなのは66～70才の層だということが明らかにされましょう。25才以下の青年の所得よりも高く（この年齢層ではまだ職をえてない若者も多いことから、この指摘でショックを受けるひとはないでしょう）、さらにまた40～50才の現役労働者よりも高いのです。たしかに、一家あたりの収入それ自体はいぜんとして現役労働者の方が大きいのですが、かれらには扶養すべき子どもたちがいます。INSEE（国立統計経済研究所）が刊行している『経済と社会』（1995年8月号）によれば、全体として60才以上の高齢者の所得は、実質的には現役労働者の所得よりも大きいのです。

これは大きなかたまりとして眺めた第3期の姿です。新しい高齢者が登場しました。昔よりも若く、はるかに元気で、ぐんと伸びた退職後の人生を楽しみ、金銭的なゆとりで満ちたひとびとがそこにいます。

しかし、生活の質というものの内実をつぶさに検討してまいりますと、恵まれた者とそうでない者のあいだに、さまざまな違いや隔りがあることが見えてきます。まずは居住のありさまから考えてみたい。

## 2

高齢者はどこに住んでいるのでしょうか。この点で、1969年に大きな変化と新しい流れが生まれました。すなわち、退職した後も高齢者がもとの自宅で暮らせるよう一連の政策がうちだされ、実施されたのです。そして、老人ホームなどの建設にはブレーキがかかり、かつては陰惨な施設である場合が多かった「養老院」はなくなる方向にむかいました。このときから、しだいに老人ホームや収容センターは自活能力を喪失した高齢者のみのためのものになっていきました（この高齢者がいわゆる第4期に属します。「第3期」と「第4

期」は、ごらんとおり自活能力のあるなしを基準として分けられるのです。つまり、第4期の高齢者とは、つねに介護を必要とする自立不能のひとびとのこと。統計によれば、自活能力を喪失する年齢は平均83才だそうです）。

さて、それでは第3期の高齢者はどこに住んでいるのでしょうか。一部のひとびとは退職を機に、都会を離れて田舎に移り住みます。こうして退職者のおよそ30%は田舎に自分の家を所有して、そこで暮らしています。田舎としてはフランスの中部あるいは南部が好まれるようです。

残る3分の2は都会に住んでいます。町の中でも中心部が好まれます。しかし、都会で暮らすひとのあいだには、はなはだしい不平等が存在します。たっぷり所得があって、ゆったりと快適な生活が営めるひとと、その反対に、狭い部屋で窮屈に暮らす恵まれないひととの隔りはいへんなものです。

しかし、それでもこの間に、ひとびとの生活は改善の方向へ大きく動いてきました。パリ＝首都圏を例に見てみましょう。この30年の初期にあたる1970年の時点では、退職年齢に達したひとびとの半数は部屋数2間（あるいは1間）の小さなアパートに住んでいました。ところが、それから15年たった時点では、退職者の半数以上が3間ないし4間の、今日の感覚でもまずまず快適といえるアパートに住めるようになりました。今日では、全国のレベルで、60才以上のひとびとの65%が自宅を所有し、さらにそのうちの35%はセカンドハウスまで所有するようになっていきます。

## 3

つぎは人間関係の問題です。高齢者はどのような人間関係のもとで生活しているのでしょうか。

もちろん、1100万をこえる大量の人口ですから、ケースはじつにさまざまです。「新しい型」の退職者に属し、家族関係や友人関係の網の目の中心にいる元気なカップルから……、つれあいを亡くし、社会的にも精神的にも完全な孤独状態にある80才の老人にいたるまで、さまざまです。この問題を調査したアンヌ＝マリー・ギルマールによれば、退職者のとる社会的行動様式はいくつかの

タイプに分けることができます。彼女はそれを五つのタイプに分けました。退職者の社会生活の五つのモデルは以下のとおり。

タイプ1 = 「引っ込み型」。このタイプの退職者は家族とも、その他のひとびともあまり関係をもたず、外部とのコンタクトはきわめて限定されたものになります。

タイプ2 = 「第3期型」。内にずっといるよりも、外に出て、ひととつきあう時間をもう少し長くするのがこのタイプ。

タイプ3 = 「余暇型」。これは外部のひととのつきあいや活動のためにお金や時間をそれなりに配分するタイプ。

タイプ4 = 「欲求型」。ひととの交流、それをもっぱら家族外のひとと交流するために時間の大半を使おうとするタイプ。

タイプ5 = 「社会参加型」。このタイプは、ひとつの行動から別の行動へとめまぐるしく移っていくことで特徴づけられます。(A・M・ギルマー『退職——社会生活の死』1972年)

こうしたタイプ分けができることを見ましても、退職者の社会的行動様式がどれほどヴァリエティに富んでいるかがうかがい知れましょう。

変化を大筋でとらえるならば、80～90年代の退職者は全体として60年代の退職者よりも一段と恵まれているといえます。60年代の退職者というのは、1900年代に生まれ、1925～30年あたりに結婚したひとびとです。これは出生率がきわめて低かった時代にあたります。したがって、退職のとき、かれをとりまく家族や知人の数も少なかった。1985年に退職したひとの場合は、これと反対です。かれは1925年前後に生まれ、出生率が高騰した戦後の時代（ベビーブームの時代）を生きてきました。子どもがいないひとは少なく、むしろ子どくさんの家族ができました。そのうえ、たいいていの場合、かれらが退職する年齢になっても、その親はまだ生きています。上に自分の親、下に孫までいる4世代家族もざらという時代になりました。先に述べましたように、退職者の大半は息子たちと同じくらい、あるいはそれ以上に裕福ですので、子どもが家を買うことになったときとか、失業しているときとか、苦しい状態にあるときには、財政的な援助するのもしばしばです。

ですから、今日の退職者は子や孫とかつてよりも密接にむすびついています。

#### 4

つぎに、30年前はほとんど問題とされなかったけれども、現在ではきわめて重要な問題となっているテーマがあります。それは、退職者は何をして過ごしていくのかという問題です。

じっさいの活動内容の検討に入るまえに、まず、今の高齢者はあらゆる方面から活動をそのかさされ、励まされ、実行しているということを強調しておきたいと思います。営利団体、レジャー産業、社会事業、文化事業、政治団体、互助会、宗教団体……などなどが、かれらに声をかけてくるのです。こうして、退職者は余暇活動（ラジオ、テレビ、映画を楽しみ、劇場、ミュージアム、旅行にでかける）や、ボランティア活動（かわいそうな子どもや困った人を助ける）のために時間をさくようにしなさいと言われるます。

(ちなみに、いま私の手元に保険会社が推薦している活動のリストがありますが、芸術創作から弓道、ヨガといった日本産のものまで、50種もの活動はいずれもたいへんお安く楽しめるのだそうです)

さて、それでは退職者は何をしているのでしょうか。

いろいろのアンケート調査の結果は、いずれも予想されたとおりのものでした。すなわち、退職後の活動はそれまでの職業、退職までの生き方と無縁のものではありません。たとえば、教師だったひとはブルーカラーだったひとよりも読書とか文化活動を好んでおこないます。一方、肉体労働者は退職すると大工仕事やスポーツ観戦により多くの時間をさくようです。また、高所得層の夫婦は低所得層の夫婦よりも長期で長距離の旅行をします。

ここでまず注意しておきたいのは、退職者の20%以上は60才をすぎても職業活動に従事しつづけるという点です。商店主、会社重役、自由業者などがそれです。ただし、65才をすぎると、こうした活動も減っていき、70才以後も仕事をしつづけるひととなると、わずか1%のみ。

女性はみな（ごくわずかの例外を除いて）食事のしたくや、お買い物、掃除・整頓といった家事のために時間をつかいます。食料品は毎日、時間をかけて買いに出かける。これはフランス人の、とりわけ庶民のあいだの根強い伝統です。ほとんどの女性たちにとって、それは義務であり、習慣であり、しかもレジャーにもなっているのです。しかし、買い物や食事のしたくをするのは女性だけの仕事ではありません。多くの男性が同じことをしています。

いずれのアンケートからも浮かびあがってくるのは、今日ではラジオ、とりわけテレビといったマスメディアが退職者の生活の柱になっていることです。あらゆる階層の退職者にとって、この娯楽が一番多くの時間をつかう活動になっています。生活環境が大きく変化し、またマスコミュニケーションが発達したおかげで、今日では（フランスでも日本でも）家庭がレジャーの場となりました。そして、高齢者たちがマスコミの最大の受け手となりました。

しかし、家のなかに閉じこもるのをいやがる退職者も大勢います。そして、それぞれの懐具合と教養程度におうじて、平凡な日常からの脱出に努めます。数字をあげるまでもなく、国内・国外の観光旅行、美術館訪問、老人大学（受講者は女性が多い）……など、高齢者の出歩きが大盛況というのを考えていただければけっこう。現在は、高齢者の行動様式が大きく変化している時代なのです。そこにはさまざまな力が作用しています。社会の力、経済の力、文化の力、マスメディアの力、政治の力など……。ですが、それぞれの力線を図示するのは容易ではありません。

## 5

つぎには、退職者がいかに願望とその満足度について考えてみましょう。

まず、退職前のひとがいかに退職後のイメージについて一言述べておきます。60年代においてはまだ、退職生活は老齢化と力の衰えと結びつけられ、人生の休息期、非活動期と見なされていました。ところが、最近ではアクティブな退職生活というイメージが強くなっています。退職後の時間

を積極的に目的実現のために利用しようと決意し、かつ実行していることに満足している元気なひとびとが、かなりの数存在することはいろいろなアンケートから明らかです。習俗の変化のなかでも、これは最大の文化的変容のひとつと言えるでしょう。

生活に関する退職者の満足度は、それぞれの所得の度合い、家族・友人関係の緊密度、そして当人の性格や心理状態によって大きく左右されます。ここで、満足度調査の項目をひとつだけ紹介してみましょう。それは退屈の度合いについての質問で、「いつも退屈、ときどき退屈、あまり退屈していない、全然退屈していない」のいずれかを選ぶというもの。70年代の調査では、55%のひとがいつも退屈、あるいはときどき退屈と答えています。ところが今日では、退職直後のひとでいつも退屈していると答えるひとはほとんどいません。退屈というのは、もっと後の段階、つまり第4期に近いあたりであらわれてきます。

全体として生活に満足しているかどうかについては、各種アンケートごとにまちまちなものがあり、なかなかはっきりとしたことは言えません。しかしながら、満足の度合いが昔よりもぐんと上昇していることはたしかなようです。1972年と、その12年後の1984年に同じ質問をした調査があります。「退職後の生活に満足していますか」というものです。1972年のときには、満足していると答えたひとは40%以下でした。12年後の1984年になると、50%以上のひとが満足していると答えています。そして、上層に属するひと、健康なひと、恵まれた家族環境にあるひとほどこの比率は高くなります。

単純に決めつけないわけではないのですが、しかし、総合的な観点から今日の退職者を眺めてみると、かれらは60年代の退職者よりもはるかに満足すべき環境にあることはたしかなようです。そして、当人たちも一段と自信にあふれ、ポジティブな自己イメージをもっているように思われます。

## 6

では、第3期にたいして一般がいかにイメージ

はどのようなものなのでしょうか。今日の第3期の新しい立場を理解するためには、第3期にかんする集会的表象についてややくわしく検討してみることが必要のように思われます。第3期をどう定義づけるか、したがってまた、第3期がどのように形成されているかは、まさしくこうした一般のイメージに基づく部分も大きいからです。一般のイメージこそが第3期の生活の形と質、そして第3期のひとびとの行動様式をそれに合うよう規定しているとも言えましょう。

しかし、この問題に関してはひとつの論争点が存在します。まず、その論争を手短かに紹介しておきましょう。かずかずの社会学的な分析が試みられていますが、そこではふたつの視点が相対立しています。わたしは一方を「ノスタルジックな」視点、もう一方を「オプティミストの」視点と呼びたいと思います。

a) 「ノスタルジックな」視点とは何でしょう。それは、今日の忌まわしい産業社会において老人は産業社会の犠牲となって見捨てられ、齢を重ねることの意味も失われていることを強調する視点です。民俗学者や人類学者が力説するところ、伝統的な社会においては、老いは一種の完成とされ、肯定的な意義をもっていました。老人は賢者であり、知識と知恵を備えた者と見なされてきました。いろいろな宗教におきましても、年長者とはご先祖の一番近くにいて、神の近くにいて者とされたのです。ところが、今日の産業社会では反対になっていると人類学者たちは主張します。今日では、一番の価値は労働の能力と科学・技術の知識をもつことにおかれる。したがって、労働から離れ、科学・技術の新しい創造と縁がなくなった退職者は必然的に何の価値もない者になってしまった。今日、老いとは失墜を意味するようになったというのです。(こうした主張はシモヌ・ド・ボーヴォワールの1970年の著書『老い』でも展開されています)

b) 「オプティミストの」視点はこれと反対で、こちらの側の社会学者や評論家は、第3期はいまこそ全体的にポジティブな存在として立ち現れ、あらためて立派な存在価値をとりもどすのだと主張します。第3期とは、世に見捨てられ、苦しみを味わう時期ではもはやなくなり、元気に楽しく

生活して、それぞれの人生の花を開かせる時期なのだということです。(参考になるのは、ピーター・ラズレット『未知の人生、サード・エイジの出現』ロンドン、1989年)

現在のフランスの実情ではどうでしょう。どちらの視点の方がより正しいのでしょうか。これに何とか答えるために、第3期についての世間一般のイメージ、そして政策的なイメージ、さらにはそこから放たれるメッセージを読みとってみたいと思います。

①経済の面を見てみましょう。いまや第3期のひとびとは、その人口の多さと財布の豊かさによって、製造業者やサービス業者、あるいは広告業者にとって絶好のターゲットになりました。積極的な消費者の大群であるこの年齢層のひとびとにむかって、コマーシャルの波がおしよせています。高齢者割引とか高齢者むけのコマーシャル・キャンペーンをしなければ、家庭電器はさばけないし、冬季のホテルの部屋も旅客機の座席もうめられないんじゃないでしょうか。こうして、広告業者はこぞってひとつの老人像の普及につとめます。すなわち、ダイナミックに動きまわり、ハッピーに消費し、ハッピーに暮らしている高齢者というイメージです。

②政治の面ではどうでしょう。第3期のひとびとは現在でも有権者全体の20%を占め、今後はさらに大きな勢力になるわけですから、いずれの政党もこの集団の利益を無視することはできません。どの政党も退職者のための政策を綱領として持っていると宣伝していますし、代々の政府も退職者の利益を守る、少なくとも大切にしよう心がけています。とくにフランスの場合、政府は給付型の退職年金にまつわる国家財政の問題と直面せざるをえません。(ここで一言。「積み立て型」のシステムの場合、退職年金は個人ごとに払い込んだものにもとづきますが、「給付型」のシステムはこれと違って、現役のひとが払い込む分がただちに退職者のための年金にまわります)。したがって、どうしても世代間の「連帯」を呼びかけざるをえないわけです。現在、政府は特別の部局をもうけて、世代間の協同を促進しております。

③労働組合の存在も重要です。労働組合は、退職した労働者を大切にすることを長きにわたって

その伝統としてまいりました。こうした伝統があったからこそ第3期なるものが歴史的につくりだされてきたのです。「ノスタルジックな」ひとびとの主張とは逆に、労働組合はこれまでも決して、ひとが労働をやめたからといって見捨てたりはしませんでした。むしろ反対に、労働組合は退職者を労働者、それも大切な先輩労働者と見なし、その働きにたいして社会はあげてお返しをするべき義務があると言い続けてきました。こういう考え方は特にフランスでは根強いものがあります。給付型の退職年金制度がしかれたのも、この考え方にもとづいているのです。

④最後に、道徳的権威である教会の役割も無視することができません。教会はつねに道徳を説き、それぞれの世代は相互に果たすべき義務があるというのです。つまり、老人は若者に、若者は老人にたいして何かをしてあげなければなりません。この種のお説教には、退職者向けの雑誌や本その他の印刷物のあちこちでお目にかかることができます。

以上のような四つの論理（商業の論理、政治の論理、労働組合の論理、教会の論理）が競合して、ほぼ首尾一貫した老人の行動モデルが一般化していったのではないのでしょうか。こうした集合的表象をもっと明確にしようとするれば、さらにつこんだ研究が必要となるでしょう。ここではごく大まかな仮説を述べるにとどめておきます。私の考えでは、われわれはそこから老人の三つのテーマといいますか、相互に結びついた三つの要請を浮かび上がらせることができるように思われます。

a) 若さの要請。スポーツなどで体を動かし、適切な食事をおこなうことによって、できるだけ長く若さを保ちなさいという要請。（例として、出版物のタイトルを紹介すると、『しっかり食べて若さを保とう』『60才過ぎても元気でいよう』『偉大なる挑戦——みんな健康に百才以上生きよう』など）

b) 活動の要請。ぼんやり過ごすのではなく、自分がえた余暇時間は新たな生きがい発見のため有効につかいなさい。個人主義と快楽主義を合体させたような要請です。すなわち、自分のことは自分で、自分の楽しみは自分で責任をもち、新しい生活のスタイルを編み出さなさい。（これも出版

物のタイトルを例に挙げますと、『第3期はまだオン・ファイト』『人生の秋こそわが青春』『60才以上が世の中をつくりかえる』など）

c) 援助の要請。子や孫の助けとなりなさい。あなたは子や孫に手渡すべき価値の持ち主なのだ。しかし、援助せよという要請は同時に援助を要求できるという面ももっています。つまり、若い世代は高齢者を援助しなければならないことになります。（タイトルの例でいえば、『ひとにやさしくなれるとき』『家族のきずな、友人のきずな』『愛ふたたび』など）

こうしたそのおかし、こうした要請は一本調子のもものではありません。個人主義（どこまでもあなたはあなた）を推賞するものがあるかと思えば、他方には愛他主義（孫の世話をしなさい）を一段と強調するものがあります。しかし、ともかくここでは道徳を論じたくするような空間ができあがっているのです。たとえば、おばあちゃんは孫の世話をしなければならぬのか、それとも、自分の時間はもっと自分のため、教養のためにつかうべきなのか。子どもたちは病気の母の世話を自分の家ですべきなのか、それとも、自分たちの自由を失わないようにすべきなのか。こうしたすべてがいまや数々の論争の種、反省の素材となっているのです。

## 7

最後に、一番むずかしくて微妙な問題にふれてみたいと思います。つまり、今日のフランスに、第3期の「哲学」というものがあるのか。まだないとすれば、それはどのようなものとしてあらわれるのか、という問題です。たしかに、一種の道徳哲学のようなものは存在します。それは先に述べたように、あちこちで大声で語られ、論争や反省をうながしてもいます。しかし、当の老人たち自身がひとつの人生哲学、人生の成熟についての確とした考えをもち、暗黙のうちにひとつの道徳哲学を実践しているといえるのでしょうか。退職者がみな一様に同調し、一斉に実行すべきドグマチックな実践哲学、そんなものはもちろんないのです。高齢者といえども、きわめて多様な生き方が許容される民主主義社会のなかにある。した

がって、高齢者のあいだにもニュアンスの差、不一致、ひとごとに異なって体得されたモラルがあるのです。しかしながら、ひとびとの大多数にとって、いまや昔のモデルがほとんどあてはまらない時代になりました。昔のモデルとは、長時間の労働にしばられる農民的な生き方とか、身分制のわくのなかに閉じこもる貴族的な生き方とか、俗世を離れた純粋に宗教的な生き方のことですが、そういうスタイルはもはやほとんどありません。

いまモデルとして支配的な生き方は、それでもひとつの倫理観に対応しているといえるのではないのでしょうか。それは個人主義ということばで一番最初にイメージされるものを中心とした倫理観、すなわち、個人の主体性と私生活を大事にしたいという倫理観です。しかし、第3期のひとびとの場合、この個人主義は節度のある個人主義、

「穏健な」とも形容できるような個人主義なのではないかと思われます。今日の退職者は、たしかにかつてよりももっと自立した生活を求めています。同時に家族や友人とのつながりも大事にしたいと望んでいます。選択の自由を自分たちの権利として要求しながら、同時に家族生活や地域での生活、政治生活や文化生活のなかで一定のポジションをキープしたいとも望んでいるのです。

結論をいいますと、ここが大事な点です。まさにこのことから、わたしたちはフランスにおける第3期の生活をベシミスティックに眺めることにはいまのところ同意できないのです。たしかに、個人のレベルではさまざまな問題があります。しかし、これらの問題への取り組みはある種の哲学、それなりの首尾一貫性とあらたな調整のための規範をそなえた道徳哲学によってなされているのです。

#### (付記)

ピエール・アンサール氏 (Pierre Ansart) は、哲学の教授資格 (Agrégation) を取得後、ベトナムの高校で十年近くに渡って哲学を教える。しかし、インドシナ戦争でフランスに帰国することを余儀なくされ、その後はパリ第七大学で教鞭を取り、現在は、パリ第七大学名誉教授。専攻は、政治社会学、知識社会学で、当初はマルクスや、ブルードン、サン・シモンなどの思想家の知識社会学的研究を行ったが、しだいに知識社会学の一般理論の体系化を目指すようになり、その成果は *Idéologies, conflits et pouvoir*, P. U. F, 1977 にまとめられる。その後、イデオロギーの表現内容の分析から、行為者がいかにイデオロギーを内面化していくかに関心に移り、これを「政治的情熱」の問題として扱った研究の成果は、*La Gestion des passions politiques*, L'Age d'Homme, 1983 として出版される。また、最近では戦後のフランス社会学に関するコンパクトな解説書 *Les sociologies contemporaines*, Seuil, 1990 がベストセラーとなった。

ここに訳出されたのは、10月9日に行われた関西学院大学社会学部研究会特別例会での報告だが、これに先立って1995年10月2日に行われた第七回日仏学術シンポジウム社会学部門 (テーマは「高齢社会における生活の質」) でまず発表されたものである。翻訳の掲載にあたっては、日仏学術シンポジウムを主催した日仏社会学会会長佐々木交賢氏の快諾を得ている。また、翻訳者の齊藤悦則氏は、アンサール氏の著書『ブルードンの社会学』をすでに訳されており、訳者として最適の存在である。

(荻野昌弘：関西学院大学社会学部助教授)